

◆編者からの応答 1 ◆

犬からみた「人類史」と「個体史」

“Human history” and “individual history” from dog’s perspective

大石 高典
OISHI TAKANORI

東京外国語大学現代アフリカ地域研究センター
Tokyo University of Foreign Studies, African Studies Center

キーワード

人と犬の関係 個体識別 発達 種を超えた歴史 犬の死と悲嘆

Keywords

human-dog relations; individual identification; developmental change; history beyond species; dog death and grief

原稿受理日：2020.1.31.

Quadrante, No.22 (2020), pp.133-136.

500頁近い大部の『犬からみた人類史』（関係者通称「犬本」）を読み込み、丁寧なコメントと批評をくださった伊東剛史さん、村上正樹さん、松本朋華さんに感謝したい。お三方には、多くの論点を提示していただいたが、紙幅の都合で全部は取り上げられないことをあらかじめお断りしておく。以下、それぞれのコメントを受けて考えたことを書いていきたい。

伊東さんのコメントで特に心に残ったのは、人と犬はどのように「歴史」を共有できるのか、という問いかけである。本書は、タイトルに人類史を掲げており、伊東さんが評の冒頭で言及してくださっているように、第一部「犬革命」の数万年単位の進化的な時間の流れ、第二部「犬と人の社会史」の過去数百年の近現代、そして第三部「犬と人の未来学」では未来に向かう開放的な時間の流れをというように複層的に配置した。第一部を置いたのは、人と犬の関係をめぐる進化と文化の相互作用を描き出したい、という欲望があったからである。そして実際、序章にも書いたように犬への探究はおのずと分野横断的な思考を要求してくる。しかし、人が動物と作る歴史や社会について

より踏み込んでみていくには、人と犬の関係を異種間の関係としてみるだけではなく、個体どうしの相互作用に踏み込んで分析していく必要があるだろう、という伊東さんの指摘は本書において不十分な点であり、その通りだと思った。

本書で犬の社会化・文化化の諸相を扱う第二部では、エスニック・グループや国民、狩猟者などある属性を持った人の集団と犬、あるいは犬種や職業犬のような犬の集団の関係が多く取り扱われている。そこでは、人の集団どうしの政治やアイデンティティの問題に犬が巻き込まれたり、近代的な世界システムの成立や近代化の中で犬の位置づけが変わっていく様子をつぶさに見て取ることができる。しかしその結果、人と犬の個体どうしの関係性についての記述は、近代化という大きな物語の中に埋没してしまったきらいがある。

第三部では、自らの犬の飼育経験を挟みつつ小説を題材にした菅原論文（第15章）や、ズーの人々と犬の親密な関係を描く濱野論文（第17章）、ダナ・ハラウェイやフリーダ・カーロと彼女たちの犬との間の関係性に言及した池



犬からみた「人類史」と「個体史」

田論文（第19章）で個人と「個犬」の関係が取り上げられている。しかし、文学作品や私的な逸話を越えて、人と犬の個体どうしのやりとりの全体像に観察者が肉薄するのは容易ではない。ともに他者である人と犬が生きる時間に、観察者が参与できるのはごくわずかな時間の切片に過ぎないからである。

人は犬を名づけ、犬は人を個体識別する。伊東さんは、人との関係における犬の特権的位置について考察する中で、犬が人を個体識別することの意味をもっと突き詰めて考えることを提案してくださっている。そこから、種を超えた歴史の可能性をめぐる記憶の問題が立ち上がる。私の論文（第7章）で紹介したバカ・ピグミーの老女が老犬を「ケア」する話に触れて、2個体が記憶の保持をもとに「自分史」を共有している可能性が提起される。老女とともに過ごした時間を、はたして老犬は記憶しているのか？ 筆者の立場からは、老女と老犬の間に、語り以外にも観察者に両者に共有された連帯感のようなものがあつたとしても、それがはたして共有された記憶に根ざすのか、それとも長期にわたる愛着の積み重ねの行動への表出がそう見えてしまうのかは分からない。記憶の問題については、犬と人の寿命や流れる時間の速さの違いも考慮する必要があるだろう。ご提案いただいたように、脳神経科学的なアプローチをまじえつつ人と犬の記憶の問題に切り込む方向性もありだと思う。もう一つは、行動学的なアプローチである。本書を編むなかで、動物を人類学する上での行動学の重要性を改めて学んだ。フィールドで撮影した映像を動物行動学者の薮田さん（第1章執筆）に見ていただいたところ、いろいろなことを教えていただいた。犬は言葉を持たないが、行動によって多くを語っている。まずは映像手段を用いて、個体どうしの相互作用を記録し、つぶさに行動を見ていくこと。そのうえで、フィールドにおいて犬について語り合うことをやってみたいと思っている。

様々な社会で人の子育てや養育についての研究がさかんになっているが、犬がどう育ち、老い、死ぬのかはつまびらかではない。犬の人口学的なデータもほとんどない。本書では、人側のジェンダーが成人男性に偏り、子ども、女性や老人の視点が弱い、というご指摘もいただいた。この点の克服も人と犬の個体どうしの関係を明らかにするうえで欠かせない課題になる。薮田論文（第1章）ではトレーニングを考えるうえでいかに発達段階が大事か書かれているが、人も犬も一生の中で発達とともに変化していく。その中での両者の関係性の変化をつぶさに明らかにすることによって、それぞれの社会における犬と人の関係について、安易な一般化をせずに理解を深めることができるだろう（図1）。

私は、ちょうど本書の企画と並行して、中央アフリカ共和国の森林地域に生きる女性 4



【図1】バカ・ピグミーの子ども（男児）と幼犬。子どもは小さいときから犬と共に過ごし、遊ぶ。発達に伴って、どのように両者が相互作用しあいながら成長していくのかは興味深い課題である。（2019年9月、筆者撮影）

名のライフヒストリーを幼児期から老人期まで追っていく『アフリカの森の女たち』（原題：*Listen Here Is A Story*）という民族誌¹の翻訳作業をおこなっていた。そこでは、一人一人の女性の日常生活についての語りや思い出話が積み上げられる中で、勝手に歴史という物語が立ち上がっていく。個々の語りが物語になる。伊東さんのコメントをいただいて、『犬からみた個体史』のような本を企画してみたくなった。実現すれば、それはとりとめもなく長ったらしいが飽きもせず読んでしまう、そんな本になるに違いない。

松本さんと村上さんは、動物の人類学と獣医学とアプローチは異なるものの、動物に関わる学問を志している。それぞれ犬好きと犬嫌いという対照的な立場から本書へのコメントをくださったが、その基礎づけになっているのもまた個人史の中での犬との出会いである。村上さんが繰り返し強調するのは、子ども時代に味わった野良犬の怖さである。そう言えば、執筆者の一人である菅原和孝さん（第15章）に本書の企画をもちかけた際、開口一番に「お前は犬に噛まれたことがあるか？」と尋ねられた²ことを思い出す。私は実は犬に噛まれた経験がない。中高生までを過ごした静岡の実家周辺では野犬はいなかったし、大学時代を過ごした京都では下宿の裏に広がっていた広大な寺の供え物を野犬の群れがやってきて荒らすという話を近所の人から聞いたくらいである。カメルーンの調査地で出会った犬たちは、番犬として吠えてくる個体はいたが、むしろキャンプの中では食事中に餌をねだってくるフレンドリーな存在だった。定住地ではどちらかというと人を恐れる犬が多いのは、「食事泥棒」のかどで制裁を受けることが多いからだろう。犬の人間化を憂い、犬とのけじめのある関係を

訴える村上さんの主張は、文脈に応じて人が犬との関係をコントロールし、種間の秩序を維持しようとするカメルーンのハンターたちの犬との付き合い方とも通じる。

一方で、他称「犬好き」の松本さんと犬の距離は限りなく近い。親しみをこめて自分の関わった犬を「彼女」や「彼」と呼ぶ。そんな松本さんの犬への姿勢からは、私に大学院時代の研究室³の同僚たちで、通称「サル屋」と呼ばれる野外霊長類学者たちを想起した。サル屋たちは、ニホンザルやチンパンジーについて、そんな言葉遣いで語る。野外霊長類学者は、何十時間、何百時間もの時間をかけて「彼ら／彼女ら」と付き合い、研究室と往復しながら思考を重ねる。松本さんもまた、ご実家が獣医であるという環境の中で、小さいころから伊東さんの言う擬人法と擬獣法の往復を無意識のうちに繰り返されてきたに違いない。うらやましい。

松本さんは、狩猟採集社会における犬の死について、維持にコストがかかる犬をなぜ「簡単に」殺せるのかと問いかける。たしかに私が調べたバカ・ピグミーの飼っている犬の死因のトップは人による殺害であった（本書186頁：表4）。しかし、いずれの死も簡単な死などではない。まず、飼い主自身による殺害事例は、獲物の肉を丸ごと盗み食いした個体に対する1例を除けば、意図的な殺害ではなく狩猟活動中の過誤によるものだった。狩猟中の事故で猟犬が亡くなることは犬を使って狩猟をする地域であれば、どこでも珍しいことではない（第14章大道論文）。そして、狩猟中の事故で犬に怪我をさせたり亡くした猟師は、深い悲嘆にくれる（第8章合原論文）。これは日本とアフリカで私が出会ったハンターたちに共通しているし、松本さんがこれまでに犬を喪った際に味

¹ ボニー・ヒューレット著、服部志帆・大石高典・戸田美佳子共訳（印刷中）『アフリカの森の女たち——文化・進化・発達の人類学』春風社。

² たしか、京都人類学研究会の懇親会の場であった。

³ 京都大学大学院理学研究科人類進化論研究室。人を研究する者は「ヒト屋」、霊長類を研究する者は「サル屋」と言われていた。

わわれたであろう感情と通じるものがあると私は信じる。また定住集落では、飼い主である狩猟採集民と隣接居住する農耕民の間のコンフリクトに犬が巻き込まれて、些細なことを理由に農耕民によって殺されてしまうことがある。人どうしの問題が、関係する動物への敵意や損害と言う形で現れるのは、アフリカの国立公園における野生動物に対する密猟問題⁴でもしばしば見られる構造である。人の代理で、動物が殺されるのである。とぼっちりを食らう犬や野生動物にとっては不条理としか言いようがない。そんな「彼ら」は生存戦略として殺されているのではない。複雑な社会状況の中で社会的現実を人と犬が分かち合うということの帰結が犬の死をもたらしている、と私は考える。

動物権の立場から、こういった「未開社会」における犬の死を批判する立場はあり得るだろう。しかし、伊東さんからも指摘があったように、本書にはストレートに動物権を扱った章を入れなかった。狗類学は、「犬による、犬のための、犬自身による研究」を標榜する（本書あとがき）。池田が言明するように、近代的な人権思想を動物に敷衍するやり方で、動物をあたかも人であるかのように「格上げして」（本書437頁）何らかの権利を付与するやり方は極めて人間中心主義的である。そこからは「当事者」であるべき動物のエージェンシーはくみ取れないのである。

このように、犬の死一つをとりあげて考えてみても、むき出しの人間中心主義と向き合う作業になる。犬について思考することは、松本さんが繰り返し言うように、「わが身に降りかかってくる」。犬から人へ、人から犬へと再帰的な思考が導かれ、犬についてだけでなく人についても自明だと思っていたことが揺るがせにされる。まさにこれこそが「犬からみる」と言う

ことの力であり、可能性なのである。

⁴ 例えば、山極（2008）は、コンゴ民主共和国のカフジ・ビエ国立公園におけるゴリラの密猟が続いた原因について、国立公園化のなかで狩猟採集生活を禁じられ周縁化された狩猟採集民トゥワのなかで、国立公園管理にいち早く参加し職を得られた者とそうでない者の間に分断と不平等感が生じたことを指摘している。山極寿一，2008.「野生動物とヒトとの関わりの現代史——霊長類学が変えた動物観と人間観」、林良博・森裕司・秋篠宮文仁・池谷和信・奥野卓司編『ヒトと動物の関係学第4巻 野生と環境』、岩波書店、pp.69-88.